

準・指標などの特定の作業が進むこととなるであろう。残された作業は膨大なものであり、来年までにできることは限られているが、この作業は来年のCSDを一つのステップとして、国際森林条約の骨子となってゆくことと予想される。林野庁としても森林総合研究所、林野庁が一体となった実務レベルのワーキンググループを作って対応しているところである。

新刊紹介.....

◎インドネシアの野生生物 (Kathy MACKINNON : *The Wildlife of Indonesia*. 1992. 292pp., PT Gramedia Pustaka Utara, Jakarta) 邦価約 3,500 円

本書はインドネシアの豊かな生態系とその保全への認識を広めることを目的として、1986年に出版された“ALAM ASLI INDONESIA”の英語版である。文中の所々にインドネシア語の単語が残されたままであるあたりからも、インドネシアの自然の賛美のみならず、著者のこの国そのものに対する思い入れが感じられる。本文は七章から構成されており、第一章では、この国への「探検史」から、動植物の伝播、そして自然や気候を全体的に紹介し、第二章から第六章において西から東へ地域ごとの生態系を、豊富な写真や図を用いて紹介している。特に図は、多雨林やモンスーン林内の食物連鎖や棲み分けが分かりやすく示されていたり、いくつかの猿類の枝を渡る動作を並べて紹介するなど、見ているだけでも楽しむことができる。また、それらに付されている説明を読むだけでも結構、満足できるかもしれない。しかし、本文を通読すると、ウォーレス線をはさんだ地域間の生態系の変化が手に取るように感じられて、またおもしろい。第七章ではこの生態系の破壊の源に人間の活動があることを改めて述べ、その保全の必要性を訴えている。インドネシアの自然への関心の高まりを受けて出版されたこの英語版は、日本でも人気の高まりつつあるエコ・ツーリズムの優れたガイドブックとしても価値ある一冊であろう。そういう意味では、より広い世界にこの豊かな生態系への認識を広めるという点からも、日本語版が出版されることを期待せずにはいられない。 (西 千秋)